

令和8年度病害虫発生予報第2号

令和8年5月1日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

4月30日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間5月2日～6月1日）の天気は次のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。向こう1か月の降水量はほぼ平年並で、日照時間はほぼ平年並でしょう。

I 特に注意が必要な病害虫

※予想される主な病害虫の発生時期及び発生量等は以下のとおりです。

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	黄化葉巻病	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○4月下旬現在、一部巡回ほ場で発生が見られる。 □媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。（コナジラミ類の欄参照） □発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて、コナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し土中に埋めるなど適切に処理する。 □「Ⅲ 各病害虫対策」及び令和3年度病害虫防除所情報第号「施設栽培トマトの黄化葉巻病対策について（半促成栽培）」（令和4年3月発行）も参考にする。 https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/220322.jyouhoudai4gou.pdf
	コナジラミ類 タバココナジラミ オシツコナジラミ	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○4月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）においてコナジラミ類はハウス外でのみ誘殺が確認されている。 ○4月下旬現在、巡回ほ場ではほぼ発生が見られていない。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。 □開口部（天窓、側窓、換気扇口等）はすべて0.4mm目以下の防虫ネットで被覆し、出入り口は二重カーテンにするなど、侵入を防止するとともに、ネットの隙間や破れ等は直ちに補修する。 □黄色粘着板が苗の生長点付近にくるように設置し、定期的に誘殺状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。 □薬剤によってはマルハナバチへの影響があるので、薬剤の選択には注意する。 □施設内外の雑草は増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かきした茎葉は適切に処理する。 □「Ⅲ 各種病害虫対策」の項も参考とする。

II 各作物の病害虫発生予報

【果 樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ	せん孔細菌病	—	平年並	<p>○4月下旬現在、一部の巡回ほ場で春型枝病斑がわずかにみられる。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□芽枯れや枝枯れ、春型枝病斑のある枝は、本年の伝染源になるため、見つけ次第除去する。</p> <p>□収穫前日数に注意し、防除暦に従い抗生物質剤を散布する。なお、天候不順（曇雨天）が続く場合は7～10日間隔で追加防除を行う。</p> <p>□モモせん孔細菌病防除マニュアル（令和6年3月発行）を参考に防除対策を徹底する。</p>
	黒星病	平年並	平年並	<p>○近年、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、ほぼ降水量は平年並の見込みである。</p> <p>□5～6月に降雨が多いと発生が多くなるため、防除暦に従い防除を徹底する。</p>
	モハモクガ	—	平年並	<p>○4月下旬現在、一部地域ではやや多い傾向であるが、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、ほぼ降水量は平年並の見込みである。</p> <p>□第1世代成虫のピークとなる5月中旬の防除を徹底する。</p> <p>□地域や園地によって発生程度に差があるので被害葉の発生をよく観察する。</p>
	ナシマルカイカラムシ	やや早い	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並だった。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□例年、5月下旬～6月上旬が1回目のふ化幼虫の発生時期にあたる。この時期は幼虫の発生が揃うため、防除が遅れないように散布する。</p> <p>□細枝に多く寄生するので、防除薬剤は主枝や側枝等の先端部にもかかるように十分量散布する。</p>
スモモ	スモヒメシクイ	やや早い	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並である。</p> <p>○4月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市）への越冬成虫の誘殺数はやや多い。</p> <p>□越冬世代成虫の飛来が増える5月中旬からの防除を徹底する。</p> <p>□被害の多い地域や晩生種では交信かく乱剤を利用する。</p>

【果 樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	黒とう病	平年並	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並であった。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□本病は展葉直後から感染するため、展葉初期から防除暦に従って薬剤を散布する。</p> <p>□特にシャインマスカットなどの欧州系品種は本病に弱いので耕種的防除（病斑がみられる枝や巻きひげの除去）を徹底する。</p> <p>□「Ⅲ 各種病害虫対策」の項も参考とする。</p>
	うどんこ病	平年並	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並であった。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□5月中下旬から葉や花（果）穂に発病するので、開花直前や小豆大期の防除を徹底する。</p> <p>□葉や花（果）穂への発病が、突発的に見られる場合がある。特に発病しやすい欧州系品種では、花（果）穂の発病状況をよく観察する。</p> <p>□風通しの悪い園や河川の近くのはほ場でも、発生が多くなる。</p>
	晩腐病	平年並	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並であった。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□病原菌は、雨水により飛散するため、落花期以降、降雨が続く場合は感染を防ぐため、ジベレリン処理後直ちにロウ引きのカサかけを行う。</p> <p>□防除暦に従い薬剤防除を徹底するとともに、ブドウ晩腐病防除マニュアル（令和6年3月発行）を参考に防除対策を行う。</p>
	べと病	平年並	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並であった。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□展葉5～6枚頃から防除を行う。この時期以降、曇雨天と低温が重なる気象状況では発生が多くなる恐れがある。</p> <p>□ほ場の立地条件や、夜温などの気象条件、品種によっては発病が多くなる事もあるので、ほ場をよく観察する。</p> <p>□発病した葉や花穂は伝染源になるため、見つけ次第除去する。</p> <p>□「Ⅲ 各種病害虫対策」の項も参考とする。</p>

【果 樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	クワコナ カイガラムシ	やや早い	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並であった。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□例年、5月上旬～中旬が1回目のふ化幼虫の発生時期にあたる。この時期は幼虫の発生が揃うため、防除が遅れないように散布する。</p> <p>□被害の多い園では、樹幹塗布による防除を併用する。</p> <p>□「Ⅲ 各種病害虫対策」の項も参考とする。</p>
カキ	落葉病類	—	平年並	<p>○昨年の発生は平年並であった。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□感染期間が5～7月と長期間にわたるため、落花後から定期的な予防散布を行う。</p>

モモハモグリガのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

スモモヒメシンクイのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【果 樹 全 般】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
果樹全般	果樹 カメムシ類	—	平年並	<p>○昨年前半の発生量は多かったが、秋以降の越冬世代の発生は平年並みであった。</p> <p>○4月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）への越冬成虫の誘殺数は平年並～やや多い。</p> <p>□果樹園ごとに飛来状況が異なるため、夕方～夜間（夜温が低いうちは昼間）に園を確認し、飛来状況に応じて地域で一斉防除を行う。</p>

カメムシのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/kajyukame.html>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	葉かび病	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して症状の有無を確認する。</p> <p>□すすかび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p> <p>□県内で効果の低下がみられる薬剤もあるため、防除薬剤は総合農業技術センター令和4年度成果情報「トマト葉かび病の抵抗性品種に感染する系統の発生および有効薬剤」(https://www.pref.yamanashi.jp/sounou-gjt/documents/r4_10_hakabi.pdf)を参考に防除する。</p>
	すすかび病	—	並 (例年比)	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病と似ており、判断が難しい場合には、防除薬剤は両方に登録のある薬剤を使用する。</p>
	灰色かび病	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	アザミウマ類	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並であり、白ぶくれ症も見られていない。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。</p> <p>□発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□侵入防止のため施設開口部に防虫ネットを設置する。</p> <p>□施設周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。</p> <p>□トマトのマルハナバチ導入施設では、薬剤の使用が制限され、発生が助長されるため注意を要する。</p>
半促成キュウリ	<u>べと病</u>	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、発生初期の防除を徹底し、発病した葉は除去して施設外に持ち出し処分する。</p>
	<u>うどんこ病</u>	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p>
	<u>褐斑病</u>	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□予防散布を徹底し、発病した葉は早期に除去して施設外に持ち出し処分する。</p>
	<u>アブラムシ類</u>	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成キュウリ	ハダニ類	—	並 (例年比)	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p>
スイートコーン	オオタバコガ	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、フェロモントラップへの成虫誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□雄穂抽出期、絹糸抽出期に薬剤防除を行う。</p>
	アワノメイガ	早い	多い	<p>○4月下旬現在、フェロモントラップへの成虫誘殺数は平年に比べてやや多い。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□雄穂抽出期、絹糸抽出期に薬剤防除を行う。</p>
	ハダニ類	並 (例年比)	平年並 (例年比)	<p>○近年、ハダニ類の発生が多く見られている。</p> <p>○4月下旬現在、一部巡回ほ場では下位葉に発生がみられる。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため、ほ場をよく観察する。特に下位葉の葉裏を確認する。</p> <p>□発生が多くなると葉の表に白いかすり状の症状が出る。このような状態になると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p>

オオタバコガ、アワノメイガのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
うどんこ病 (施設)	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p>

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
灰色かび病 (施設)	—	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した茎葉、花、果実は除去して施設外に持ち出し、処分する。</p> <p>□前年多発したほ場では発生に注意し、予防散布に努める。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p>
アブラムシ類	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p>
ハダニ類 (施設)	平年並	平年並	<p>○4月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高い見込みである。</p> <p>□今後、気温の上昇とともに増加する恐れがあるため注意する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p>
オオタバコガ		平年並	<p>○4月下旬現在、フェロモントラップへの成虫誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除に重点を置く。</p> <p>□果実での食害痕や虫ふんを目安に幼虫を見つけ、捕殺する。</p> <p>□夏秋ナスでは、5月中旬から若齢幼虫が見られ始めるので、初期防除を徹底する。</p>

オオタバコガのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【稲】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
いもち病 (苗)	平年並	平年並	<p>○向こう1カ月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見、早期防除に努める。</p> <p>□育苗日数が長引かないように注意する。</p> <p>□発病苗は見つけ次第、処分する。</p>
イネミズゾウムシ	平年並	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並であった。</p> <p>○向こう1カ月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□6月上旬までに田植えをする場合は、育苗箱施用剤を必ず処理する。</p> <p>□育苗箱施用剤を処理しなかった場合、成虫が2株当たり1頭以上認められたら、粒剤の散布を行う。</p>

【樹木類】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
アメリカシロヒトリ	やや早い	平年並～やや多い	<p>○向こう1カ月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>○前年の発生量は多かった。</p> <p>□発見が遅れると被害が増加し、薬剤効果も低下するため、早期発見、早期防除に努める。</p> <p>□幼虫が分散する前に巣網を取り除く。</p> <p>□例年5月中下旬頃が1回目の若齢幼虫の発生時期にあたり、この時期の防除が最も重要であるので、丁寧に薬剤散布する。</p> <p>□公園、街路樹等における防除にあたっては捕殺を優先し、やむをえず薬剤散布を行う場合は、飛散防止対策を徹底する。</p>

防除薬剤は県病害虫防除基準・農薬適正使用指針による。
ただし、他作物が隣接して栽培されている場合は、農業協同組合が作成した代替薬剤の防除暦等を参考に、薬剤の選択を行う。

III 各病害虫対策

【ブドウ黒とう病の防除対策】

- (1) 本病の感染時期は早く、早春から菌が動き出し、雨水に混じって伝染するため、生育初期からの防除を徹底する。
- (2) 病斑が見られる結果母枝、新梢（葉、巻きひげなど）等は見つけ次第除去する。
- (3) 特にシャインマスカット等の欧州系品種は本病に弱いので、耕種的防除と併せ、防除基準や防除暦に従い定期的な予防散布に努める。

【ブドウべと病の防除対策】

- (1) 新梢管理（芽かき、誘引、摘心等）により、棚面の明るさや風通しを確保し、葉・花穂に薬剤が充分付着するように努める。
- (2) 展葉後、曇雨天が続く年は開花前から葉や花穂で発病し、その後多発する傾向があるため、管理作業と合わせ発病の有無を確認する。また発病した葉や花穂は、伝染源となるため、見つけ次第取り除き、ほ場から持ち出し処分する。
- (3) 散布開始時期は展葉5～6枚頃から行い、散布間隔を10日以内とし予防散布に努める。
- (4) 薬剤散布量を遵守する。
- (5) 散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を延期せず、降雨日前に散布する。
- (6) 散布後に降雨が続いたり、集中豪雨があったりした場合は、防除効果や残効期間が短くなるため、散布間隔を短くする。
- (7) べと病防除剤の注意事項
 - ・天候不順が予想される場合や発病初期には、防除暦に従いオロンディスウルトラ SC2,000倍（2回以内）またはジャストフィットフロアブル 5,000倍（1回以内）をかけむらのないよう丁寧に散布する。なお、シャインマスカットの場合はジャストフィットフロアブルの使用は控える。またオロンディスウルトラ SCは耐性菌の発生を防ぐため、連用しない。
 - ・べと病防除剤は立木類に作物登録がないものが多いため、農薬ラベルをよく確認するとともに、周辺に立木類がある場合は飛散しないよう充分注意する。
 - ・オーソサイド水和剤 80～800倍（使用回数は計3回まで）は、キウイフルーツの隣接園では飛散しないよう充分注意する。また、スモモに薬害が発生する恐れがあるため、隣接園では飛散に注意する。

【ブドウ灰色かび病の防除対策】

- (1) 開花～落花期が天候不順にあたると、花かすが残りやすく発病しやすくなるため、防除を徹底する。
- (2) 開花前から防除基準や防除暦に従い予防散布に努め、開花後には花かす落としも徹底する。品種によっては花冠が残ったままではサビ果発生の要因となる。
- (3) 発病した花穂や果粒は、見つけ次第取り除く。

【ブドウのクワコナカイガラムシの防除対策】

- (1) 越冬した卵のふ化時期である、5月中旬にモメントフロアブル2,000倍またはトランスフォームフロアブル2,000倍を散布する。この時期は幼虫の発生が揃いやすく、防除効果が高いため、遅れないように散布する。
- (2) 前年発生が多かった園では、5月上旬に主幹から主枝の粗皮剥ぎを行い、スタークル顆粒水溶剤またはアルバリン顆粒水溶剤の樹幹塗布(20～40g/樹)を行う。

【ブドウのミカンキイロアザミウマの防除対策】

- (1) 開花期に加害するため、防除基準や防除暦に従い本虫に効果のある薬剤で防除を行う。
- (2) 開花前に園内の草刈りや除草を徹底する。

【施設ブドウのハダニ類対策】

- (1) 例年、気温が高くなる時期以降から発生がみられる。発生はスポット的に始まるので、発生初期を見逃さず防除を徹底する。
- (2) 防除基準や防除暦を参考に、殺ダニ剤の散布を行う。発生が拡大してからの防除では発生を抑える事は難しく、多発すると果実品質にも影響が出るので初期防除に努める。

【立木類（モモ、スモモ）のアブラムシ類対策】

- (1) 発生初期の防除を徹底する。
- (2) 発生が続く場合は、アドマイヤー水和剤2,000倍またはウララDF2,000倍を追加散布する。

【オウトウのオウトウショウジョウバエ防除対策】

- (1) 中・晩生種で被害が増加するため、果実の適期収穫に努める。特に加温ハウスや取り残した果実が多い園の隣接園では、発生が早いので観察し初期防除に努める。
- (2) 発生状況に注意し、初期からの予防防除を徹底するとともに、収穫が長引く場合は追加防除を行う。
- (3) 被害果は土中に埋める等、適切に処分する。

【トマトのウイルス病（トマト黄化葉巻病、トマト黄化病）を媒介する コナジラミ類の防除対策について】

- (1) コナジラミ類の侵入を防ぐため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）に0.4mm目以下の防虫ネットを設置する。特に、出入り口のカーテンは二重にして侵入を防止するとともにネットの隙間がないか、経年劣化等による穴の有無など施設の点検を励行する。
- (2) 施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の発生状況を確認することで、適期防除に努める。
- (3) 薬剤効果の低下が認められるタバココナジラミ（バイオタイプQ）が広く存在するため、薬剤選択に注意する。なお、同一系統薬剤の連用は、薬剤効果の低下につながるため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を実施する。
- (4) 施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源となるため、除草を徹底する。また、トマト以外の植物を施設内で栽培しない。
- (5) 発病株は見つけ次第抜き取り、透明のビニール袋に入れ、日光に当てて高温にして虫を死滅させてから、施設外に持ち出し土中に埋める。
- (6) 芽かき、葉かきした茎葉は、コナジラミ類の増殖源となるため、ビニール袋に入れて枯死させてから持ち出す。

【夏作物作付前の対策】

ナス青枯病、ナス半身萎ちょう病、トマト青枯病、トマト半身萎ちょう病、キュウリつる割病、
土壌線虫等

- (1) 苗は抵抗性台木を用いる。また、ほ場は過湿を避けるため高畝にして排水対策を実施するとともに、連作をさける。
- (2) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、本畑の土壌消毒を行う。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、以下の点に注意する。

- (1) 未発生ほ場で生産されたことの確認などにより、健全な種苗を確保する。
- (2) 植え付け前の種苗消毒を行う。
- (3) 栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和4年度版）」

[stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04a.pdf \(naro.go.jp\)](https://www.naro.go.jp/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04a.pdf)

【稲】

種子伝染性病害対策

種子伝染性病害では、主にいもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病などがある。以下の点に注意し、は種前の防除を徹底する。

- (1) 発病ほ場の籾は、種子として使用しない。
- (2) 塩水選を行い、り病籾を選別し、取り除く。
- (3) 薬剤による種籾の消毒は同時防除を徹底する。

いもち病、もみ枯細菌病、ばか苗病の同時防除を行う場合は、次のいずれかの方法で行う。

- ①乾燥籾を薬剤（スポルタックスターナSE200倍又はテクリードCフロアブル200倍）に24時間浸漬する。
- ②乾燥籾を薬剤（上記薬剤の各20倍液）に10分間浸漬する。

なお防除効果を高めるため、薬液の温度は15℃以下にならないようにする。

苗立枯病対策

苗立枯病は、主にリゾープス菌やピシウム菌、フザリウム菌、トリコデルマ菌などの糸状菌によって引き起こされる。以下の点に注意し、育苗期の防除を徹底する。

- (1) 育苗ハウス、床土及び育苗箱の消毒を徹底する。
- (2) 緑化期以降は昼間25℃以上、夜間10℃以下にならないよう、保温資材の開閉はこまめに行う。
- (3) リゾープス菌による立枯病を防ぐため、べた積みは避ける。高温や多湿、過灌水にならないようにする。

【麦類】

赤かび病対策

麦類（小麦及び大麦）の赤かび病は、発病することにより品質の低下や収量の減少が生じるほか、フザリウム属菌が、人や家畜の健康に悪影響を及ぼすかび毒であるデオキシニバレノールやニバレノールを産生する。

本年は、春先から気温が平年より高く推移しているため、麦類の生育は平年と比べ旺盛であり、出穂期及び開花期が早まる可能性が示唆されている。以下の点に注意をし、適期防除を徹底する。

(1) 麦の種類と最初に防除を行う生育時期

小麦：開花を始めた時期から開花最盛期

（1穂につき数花開花をしているものが、全穂数の40～50%に達する時期）までの間
二条大麦：穂揃い期（全茎の80%～90%が出穂した日）の10日後頃の葍殻抽出期

六条大麦：開花を始めた時期から開花最盛期までの間

(2) 地域の気象条件、中長期の天気予報、過去の赤かび病発生状況、品種の赤かび病に対する抵抗性の程度等を考慮し、必要に応じて開花10日後から20日後までを目安に追加の防除を行う。

(3) 防除適期に降雨が続く場合には、降雨の合間を利用して確実に防除を実施する。なお、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤の連続使用は避けるようにする。

IV その他

【水田において使用する農薬の止水期間の遵守について】

- (1) 農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認し、止水期間を7日間とする。また、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備に努める。
- (2) 特に、水稻の移植前に使用することができる農薬については、農薬のラベルにおいて使用時期が「植代時から移植4日前まで」とされているものであっても、農薬の河川等への流出を防止するため、使用時期は植代時から移植7日前までとし、移植6日前以降には使用しないこと。

【令和8年度 病虫害防除基準・農薬適正使用指針】 が刊行されました。

価 格：2,500円（税込、送料無料）

お問合せ先：山梨県植物防疫協会

〒400-0034 甲府市宝1-21-20（山梨県農業振興公社内）

TEL：055-232-2760

FAX：055-223-2117

【農薬は正しく使いましょう】

（農薬の適正使用について）

https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku_shiyou.html 参照

連絡先

山梨県病虫害防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病虫害防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病虫害写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>